会津医療センターから こんにちは！

【１３】 小腸・大腸・肛門科学講座
教授　遠藤　俊吾

『がん治療のプロチーム』

がん、と宣告されたときの反応は「なんでこんな病気になったのか」「死ぬのかなぁ」「あの時に病院に行っていれば、もっと早期で見つかっていたかも」とさまざまなことが一気に頭の中に渦巻くそうです。１週間程度の混沌（こんとん）から、少しずつ頭の中が整理され、「がん」なんかに負けるものかといった前向きな気持ちを持つようになる、とも。

人の寿命は誰にもわかりません。落語の「死神」に出てくる「ろうそく」のように目に見えるわけではありません。「末期がん」と宣告された方が５年以上生存することもあります。

そんな「がん」に対する手術療法、抗がん剤治療を担当していると、必ず聞かれることがあります。「何を食べると良いのでしょうか？」「どうすると体に良いのでしょう？」などなどです。

最近、加齢や疾患で骨格筋が減少する病態「サルコペニア」が注目されています。体の筋肉量が多い方が、がん治療の成績が良い（予後が良い）とする知見が報告されています。当院で大腸がんに対して抗がん剤治療を受けている患者さんを調べた結果も、筋肉量が多い方の予後の方が良いことが分かりました。さらには治療中に筋肉量の減少が少ない方も同様に予後が良いという結果でした。筋肉をつけるためには、食事が大切なのはもちろんですが、運動も必要です。

会津医療センターにはがん治療を専門とする医師のほかに、がん看護を専門とする看護師やがん患者さんの栄養管理に積極的な栄養士がいます。がん治療の過程では、さまざまな悩みや解決が困難に思える問題に出くわします。そんな時にわれわれ医師とは違った目線で話を聞き、相談に乗ってくれるのが看護師や栄養士です。がん患者さん同士が話し合える「がんサロン」も開いています。がんの治療は、手術や抗がん剤、放射線治療だけでなく、精神的なサポートや栄養管理も必要です。当院ではさまざまな職種のプロがチームでがん治療を行っています。